焼津＆八雲 YY プロジェクト
活動報告

2016−2017

静岡県立大学国際関係学部
細川光洋ゼミ
焼津小泉八雲記念館
焼津市観光協会

はじめに

『怪談』で知られる文学者小泉八雲（Lafcadio Hearn 1850−1904）は、晩年、夏の避暑地としてしばしば焼津を訪れ、家族とともに水泳などをして過ごしました。八雲は焼津の海と町と人を愛し、この地の風物や伝承をもとに、「焼津にて」「乙吉のだるま」「漂流」等の作品を残しています。焼津では、小泉八雲顕彰会による資料の保存と顕彰が継続して行われ、2007 年には焼津小泉八雲記念館（焼津市三ヶ名）が開館しました。焼津小泉八雲記念館は、西の松江の小泉八雲記念館とともに、八雲文学の重要な研究拠点ともなっています。

焼津小泉八雲記念館、焼津市観光協会、静岡県立大学との産館学連携プロジェクト――「焼津＆八雲 YY プロジェクト」は、2016 年 7 月に発足しました。長年焼津の地で親しまれてきた小泉八雲を「地域の文化資源」としてとらえ直し、その文学の魅力にあらたな光をあてるとともに、八雲の文学を通して地域の魅力を発信していくことを目指すプロジェクトです。「YY プロジェクト」という名称は、焼津・八雲それぞれのイニシャルを表すだけでなく、八雲の顕彰を通じて焼津の町を「わいわい賑やかにしたい」という願いを込めて、学生たちと考えたものです。以後、公開プレゼンテーションを皮切りに、八雲作品ゆかりの地での朗読会の開催、妖怪スケッチを元にした手拭いの制作、焼津市役所との LINE スタンプの共同制作、シンポジウム「地域資源としての文学～小泉八雲による地域づくり～」の開催と精力的に活動に取り組んできました。

「焼津＆八雲 YY プロジェクト」の立ち上げメンバー８名は、静岡県立大学国際関係学部で日本近代文学を専攻する細川ゼミの１期生にあたります。2016 年 4 月初めに研究室で「ゼミの歴史をいっしょに作っていこう」と話したことを覚えています。2017 年には２期生９名を迎え、活動はさらに広がりを持ったものとなりました。「新しいものを生みだしたい」という彼等の若々しい情熱と瑞々しい感性が、プロジェクトの大きな推進力となりました。

今春、１期生を送り出すにあたって、プロジェクト活動の「なかじきり」として本冊子は作成しました。いわば、ゼミの「歴史」の１ページ目ということになります。これまでのプロジェクト活動の周知にとどまらず、「地域資源としての文学」をテーマとしたこの活動をもとにして、新しい地域での取り組みが生まれることを願って制作しました。

本冊子を編むにあたり、ともにプロジェクトを支え、推進してくださった焼津市観光協会の橋ヶ谷昌広事務局長、焼津小泉八雲記念館の学芸員那須野絢子様より、ご多忙な中、ご寄稿いただきました。お二方だけではなく、関係者の皆さまや地域の方々に励ましと助言をいただきながら活動を続けることができました。心より感謝申し上げます。

なお、本プロジェクトの実施にあたっては、平成 28 年度、平成 29 年度の「ふじの

くに地域・大学コンソーシアム ゼミ学生地域貢献推進事業助成金」、並びに平成 28 年度「静岡市・焼津市地域課題解決事業助成金」、平成 29 年度「しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業助成金」のご支援を受けました。併せて報告・プレゼンテーションの機会をいただいたことは、学生たちにとって貴重な体験となりました。

また、これらの取り組み全般に関しては、静岡県立大学「ふじのくに」みらい共育センター（地域・産学連携推進室）COC 事業からの懇切な支援とアドバイスをいただきながら実施しました。本プロジェクトは、地域とともに課題解決に取り組むことを目標に掲げた、本学における COC 事業の成果の一部であることを申し添えます。

2018 年 2 月

静岡県立大学国際関係学部

細 川 光 洋

目　次

はじめに …… 1

卒業おめでとう。攻めの姿勢で！　橋ヶ谷昌広 …… 5

活動の軌跡

焼津＆八雲YYプロジェクト　活動の軌跡 …… 6
焼津＆八雲YYプロジェクト　メディアでの紹介一覧 …… 8
焼津＆八雲YYプロジェクトをふり返って　原田幸枝 …… 9
　YYプロジェクト 公開プレゼンテーション …… １０
　八雲作品の朗読と箏曲のしらべ …… １４
　焼津市長への成果報告～八雲手拭い・妖怪手拭いの完成披露 … １６
　地域貢献プロジェクト成果発表会 …… １７
　八雲で奏でるYaidzuノスタルジー …… １８
　第十回 浜通り 夏のあかり展 朗読会 …… ２０
　やいちゃん公式LINEスタンプ制作発表会 …… ２２
　シンポジウム「地域資源としての文学」 …… ２３
シンポジウム「地域資源としての文学」を終えて
　ー「焼津＆八雲YYプロジェクト」と焼津の未来ー　那須野絢子 … ２８

資 料 編

企画要綱 …… ３０
企画書　焼津＆八雲YYプロジェクト …… 31
　概要・YAIDZU 八雲妖怪８紹介・商品企画案
朗読用台本１　「焼津にて」抄 …… ３６
朗読用台本２　「漂流」 …… ４０
成果物一覧 …… ４６

後　記 …… ４８

卒業おめでとう。攻めの姿勢で！

平成 28 年 9 月 9 日、小泉八雲をモチーフにした商品開発発表会のことを懐かしく思います。

焼津の観光資源として八雲を売り出すきっかけを模索している中で、細川先生と知り合い、観光と文学、観光と産業、観光と地域活性化という視点で細川先生はじめ、ゼミ生の皆さんと大いに議論したことを昨日のことのように覚えています。YY プロジェクトの発足ですね。

発表会では、皆さん緊張しながらもプレゼンを楽しんでいましたね。社会人を対象とした初めての公開プレゼンとは思えないほど、落ち着いた説明やスムースな進行など、また、各人が役割分担しながら熱心にプレゼンを遂行していましたことに感心しました。また、「焼津と八雲文学との関わりあい」「商品化にするためのストーリー性の確立」など、皆さんは個々人課題をもって取り組んでいました。

企画提案の中で、八雲作品に登場する妖怪のグッズ企画商品は、プレゼンに参加してくれた地元のお菓子屋さんや文房具屋さん、かまぼこ屋さん、石材店の方々にとても好評でした。「家に帰ったら早速研究してみよう」「素材の活用が広がり期待が持てそう」など参加者からの意見が多々あり、プレゼンそのものは大成功だったと思いました。裏を返せば、皆さんは、活性化という名のもとに、企画商品をいつ商品化に向けて着手してくれるんだろうと、焼津の参加者に逆提案していたのでしょう。これこそがまさしく戦略的なプレゼンであって、地域の活性化につながっていくことになるのでしょう。

そうした中で、商品づくりの一つとして「八雲手ぬぐい」「妖怪手ぬぐい」の試作商品は大変好評で、八雲記念館に訪れる多くの八雲ファンに購入していただいております。焼津のお土産として確立されつつあり、改めて八雲が観光資源だと気づかせてくれました。八雲の代表作である怪談には多くの妖怪が登場します。その題材を利用し商品化に結び付けるという可能性を提示していただいたことに大変感謝しております。

最後になりますが、朗読会やイベント参加なども含めた皆さんの活動が、焼津の活性化につながっており、生き続いています。卒業してからも焼津のこと、八雲のことを思い出していただければ幸いです。

改めまして、１期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。悔いのない、攻めの姿勢で青春を謳歌してください。

平成 30 年 1 月

焼津市観光協会 事務局長　橋ヶ谷昌広

焼津＆八雲YYプロジェクト
活動の軌跡

2016年（平成28）

6月15日（水）　焼津小泉八雲記念館・焼津市観光協会・細川の三者による初会合。

7月 5日（火）　**〈焼津＆八雲YYプロジェクト〉の発足**
記念館（仁科主幹・那須野学芸員）・観光協会（橋ヶ谷事務局長）・細川ゼミ学生出席による連携プロジェクトの立ち上げ。
於．記念館多目的室 14:30

8月31日（水）　記念館多目的室でのプレ・プレゼン（事前練習）の実施。

9月 9日（金）　**〈YYプロジェクト 公開プレゼンテーション〉**
於．記念館多目的室 14:30～16:30
八雲を活用した地域活性化や関連商品開発の提案。

10月　「八雲シール」の制作。

10月27日（木）　海蔵寺（朗読会会場）下見。

11月27日（日）　**〈八雲作品の朗読と箏曲のしらべ〉朗読会①**
於．海蔵寺（焼津市東小川）16:00～18:00
油屋さんのご協力により、会場で「八雲シール」付きの「みそまん」を販売。

12月 3日（土）　**〈第３回カレッジサミット〉**
於．静岡文化芸術大学 中講義室280Ａ　13:00～16:30〔15:10〕
発表テーマ「小泉八雲を活かした焼津市の地域活性化」
県立大学の代表ゼミとして招聘されプレゼンを行う。

2017年（平成29）

1月24日（火）　ゼミ終了後、「八雲手拭い」「妖怪手拭い」のデザインを検討、確定。

2月18日（土）　**〈第２回ふじのくに地域・大学フォーラム〉**
於．静岡文化芸術大学 第１会場（南176教室） 10:00～15:30〔15:20〕
発表テーマ「小泉八雲を活かした焼津市の地域活性化（地域デザイン）」

3月21日（火）　**〈研究成果発表会〉～大学との連携による地域課題解決事業～**
於．静岡市産学交流ｾﾝﾀｰ（Ｂ-nest）7F 大会議室 10:00～12:00
発表テーマ「焼津ゆかりの作家小泉八雲の地域資源としての活用」
「八雲手拭い」「妖怪手拭い」を初お披露目。

3月29日（水）　**〈焼津市長への成果報告～八雲手拭い・妖怪手拭いの完成披露〉**
於．焼津市役所　13:30
中野弘道焼津市長を表敬訪問し、プロジェクトの成果報告を行う。

2017年（平成29）

6月　「八雲シール」「八雲手拭い」「妖怪手拭い」の市販化を開始。
雑誌「幽」vol.27に「八雲手拭い」「妖怪手拭い」の紹介記事掲載。

6月17日（土）　**〈地域貢献プロジェクト成果発表会〉**
於．静岡県立大学 看護学部棟4F 13411教室　16:30～18:30
発表テーマ「焼津ゆかりの作家小泉八雲の地域資源としての活用」
平成28年度**「地域みらい研究賞」**受賞。

6月24日（土）　**〈八雲で奏でるYaidzuノスタルジー〉朗読会②**
於．焼津小泉八雲記念館多目的室　14:00～16:00
焼津小泉八雲記念館開館10周年記念事業。

7月 9日（日）　常照寺（朗読会会場）下見。

7月23日（日）　NPO 浜の会と「夏のあかり展」に出展する行灯を制作。

8月 5日（土）　**〈第10回 浜通り 夏のあかり展〉朗読会③**
於．常照寺（焼津市城之腰）19:00～20:30
主催：NPO 浜の会　「妖怪行灯」８基を出展。

8月 7日（月）　**〈やいちゃん公式LINEスタンプ制作発表会〉**
於．焼津市役所 会議室101号室　14:00
焼津市役所（若者倶楽部）、徳田有希（ｲﾗｽﾄﾚｰﾀｰ）氏との共同制作。

10月 8日（日）　**〈シンポジウム「地域資源としての文学～小泉八雲による地域づくり～」〉**
於．焼津文化会館小ホール　13:30～14:40/15:00～16:40
小泉八雲来焼120周年／焼津小泉八雲記念館開館10周年記念ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ
第２部 パネリストとしてプロジェクトの紹介・ディスカッション。
基調講演：梅本順子（日本大学教授）
ﾊﾟﾈﾙﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ：小泉凡・松永六郎・島根県立大学短期大学部ゴースト
みやげ研究所・静岡県立大学焼津＆八雲 YY プロジェクト
「妖怪クリアファイル」の制作。

2018年（平成30）

2月17日（土）　**〈第３回ふじのくに地域・大学フォーラム〉**
於．日本大学国際関係学部三島駅北口校舎　13:00～17:00
発表テーマ「小泉八雲を活かした焼津市の地域活性化（地域デザイン）」

3月　静岡県立大学「コミュニティーフェロー」認定・特別表彰（予定）

https://twitter.com/y_y_project

焼津＆八雲YYプロジェクト
メディアでの紹介一覧

2016年（平成28）

9月 7日（水）　「静岡新聞」朝刊
「小泉八雲×妖怪 食品や文具考案／地域振興の起爆剤に」
←8/31 プレ・プレゼン
「焼津＆八雲 YY プロジェクト」の紹介と公開プレゼンの案内。

9月10日（土）　「中日新聞」朝刊
「小泉八雲の魅力商品に／企業招き 県立大生ら企画案説明」
←9/9 公開プレゼン

11月29日（水）　「静岡新聞」朝刊
「八雲怪談 箏曲交え表現」←11/27 海蔵寺朗読会

2017年（平成29）

3月22日（水）　「静岡新聞」朝刊
「地域課題解決へ／若者がアイデア」←3/21 研究成果発表会

3月29日（水）　静岡朝日テレビ「とびっきり静岡」18:15放送
「妖怪で町おこし」←3/29 焼津市長への成果報告

3月30日（木）　「静岡新聞」朝刊
「八雲の世界手拭いに」←3/29 焼津市長への成果報告

4月12日（火）　「静岡新聞」朝刊
「この人」欄（澤野華世子）

6月26日（月）　「静岡新聞」朝刊
「焼津小泉八雲記念館10年／県立大生が朗読披露」
←6/24 Yaidzuノスタルジー朗読会

8月 8日（火）　「静岡新聞」朝刊
「やいちゃん「LINEスタンプ」に」
←8/7 やいちゃんLINEスタンプ制作発表会

8月19日（金）　「日本経済新聞」朝刊
「しずおか 涼の風景」欄、「寺で怪談 背筋ゾクゾク」
←8/5 あかり展 常照寺朗読会

10月13日（金）　「静岡新聞」朝刊 一面コラム「大自在」←10/8 シンポジウム

焼津&八雲 YY プロジェクトをふり返って

1 期生ゼミ長　原田幸枝

細川先生から焼津・八雲と連携したプロジェクトの原案を聞いたのは、2016 年の初夏だったと思います。正直に言うと、目的地として焼津に行ったことがなく、小泉八雲にも詳しくなかった私は不安でした。7 月の下見では浜通りにあるお店で初めて魚河岸シャツに触れ、8 月の「夏のあかり展」では行灯の幻想的な光と空間に感動しました。それからは打ち合わせを重ねて、少しずつ八雲や焼津の情報を共有していきました。

最初の大きなイベントと言えば、9 月 9 日の公開プレゼンテーションだと思います。本番に向けて、まず商品や企画の案を考えることから始まりました。マーケティングの知識がない者としては、今実際に売れているものにヒントを得るのが確実だと考え、幅広い世代の人が利用する雑貨屋を巡りました。そこで原画の鳥獣戯画が描かれたランチョンマットなどのグッズを見つけ、「ただ可愛いだけ」でない、使用時の話題作りにつながるような商品を思いつきました。鳥獣戯画のモノクロでシュールな様子が、八雲の手書きの妖怪イラストとそっくりなのです。（そして最終的には八雲のイラストをそのまま使用し、焼津らしさの象徴でもある魚河岸マークと一緒にあしらった「妖怪手拭い」が完成しました。）

たくさんの案を携えて、8 月末にプレ・プレゼンテーションを行いました。ご指摘いただいた改善点をもとに、一から商品案の絵を描き直すなどパワーポイントに修正を加え、話す内容・スピード・声の大きさなどをアドバイスし合い、タイムを計りながら何回も練習しました。そうして 9 月 9 日の本番を迎えました。当日はお忙しい中多くの地元企業様や取材の方にお越しいただき、緊張しつつもなんとか成功に終わりました。

プレゼンテーション後は駆け足で進んでいきました。焼津のシティーカラーを使用した「八雲シール」の製作に続き、11 月の海蔵寺での朗読会では、八雲がいた時代から販売されていた油屋さんの「みそまん」とコラボレーションさせて販売しました。私は初朗読会に加えて初司会で、原稿作成に苦労したのを覚えています。その後は活動報告の場が何回かあり、大勢の前で発表する貴重な経験になっただけでなく、他大学の学生との交流の機会になりました。2017 年 4 月になると後輩たちがプロジェクトに加わりました。6 月には焼津小泉八雲記念館で朗読会を、8 月には「夏のあかり展」に出展者側として参加し、朗読を行いました。会場から溢れるほどの人に驚きましたが、後輩が主導となって素晴らしいイベントになったと思います。私は演奏者の浴衣の着付けとプロジェクト紹介を担当したのですが、着付けで予想以上に汗をかき、本番中や紹介中も大量の汗をかいていました。汗・自然の風・虫の声・怪談という組み合わせが本当に夏らしく、恥ずかしくもありますが一生の思い出です。同じく 8 月には制作に携わった「やいちゃん」の LINE スタンプも販売され、いよいよ活動の幅が広がってきたと感じました。

10 月 8 日に焼津文化会館で行われたシンポジウムは、私たち 4 年生にとって最後の活動でした。ほぼ 1 年という短い期間に、非常に濃い経験をしました。プロジェクトが進行して大きくなる度、私たちも一緒に成長したように思います。心残りがあるとしたら、お菓子の商品を開発できなかったことです。後輩たちに期待をしつつ、試食会の開催を楽しみにしています。

YYプロジェクト 公開プレゼンテーション

資料編参照

日程：2016年９月９日（金）14：30～16：30

場所：焼津小泉八雲記念館　多目的室

思い返してみれば今更なのだが、私達は細川ゼミの 1 期生である。先輩も居らず一からの活動であったが、それぞれ個性と才能のある同級生達とのびのびと活動が出来たことを運がよいと正直に思う。

YY プロジェクトを通し、これまで小泉八雲と焼津を掛け合わせた商品の提案や、朗読会の開催、学外での発表など、このゼミに入らなければ体験しなかったであろうことが多い。その中で一番、というのは私には難しいのだが、最も懐かしさを感じるのは 2016 年 9 月 9 日に焼津小泉八雲記念館で行った発表会である。焼津市の地元企業や NPO の方々を招き、八雲の妖怪を基に考案した菓子、マグカップ、また文房具などの企画案を発表した。これは私たちにとって初めての人前で行う大きな活動であった。案を出し合い、資料を作り、発表のための原稿を考え、読み合わせをした。発表後、厳しい意見を頂かなかったわけではなかった。しかし、なぜだか私は、それまでいくつも案を出しては悩んだゼミ室、ノートのページいっぱいに原稿を書く横顔、何度も発表練習をする姿、自分の時間を削って取り組んでくれていた友人たちを思い返し、やけに堂々とした気持ちであったことを覚えている。この活動に限ったことではなく、先生はいつも私達のため“一役も二役も”程度では済まないほど手を貸してくださっていた。また、これまで様々な活動ができたのは同級生達がそれぞれ力を持ち、時間や労力を惜しむことなく取り組んでくれていたからだと思う。私は別段何をしたわけではなかったのだが、そのような環境で貴重な体験が出来たことをやはり運がよいと思っている。（青島）

八雲作品の朗読と箏曲のしらべ

日程：2016年11月27日(日) 16：00～18：00

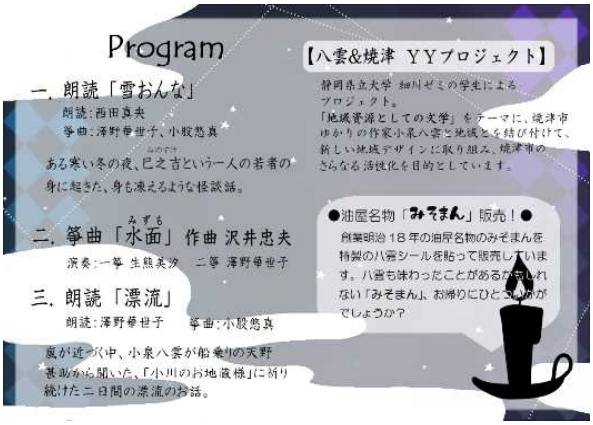
場所：海蔵寺本堂（焼津市東小川）

【プログラム】
一、朗読「雪おんな」
　　朗読: 西田真央
　　箏曲: 澤野華世子、小股悠真
二、箏曲「水面」(沢井忠夫 作曲)
　　演奏: 一箏　生熊美汐
　　二箏　澤野華世子
三、朗読「漂流」
　　朗読: 澤野華世子
　　箏曲: 小股悠真
アンコール、「みずうみの詩」
　　(森岡章 作曲)
　　演奏: 一箏　生熊美汐
　　二箏　澤野華世子

YY プロジェクトが発足してから、企業に向けたプレゼンや商品開発など様々な活動をしてきましたが、特に印象に残っていることは、十一月に小泉八雲作品「漂流」の舞台になった海蔵寺で行った朗読会です。このイベントでは、箏曲部による演奏に合わせて、八雲の焼津にちなんだ作品の朗読会が行われました。夕暮れ時のおどろおどろしい雰囲気は、作品にとても良く似合っていました。朗読中に恐ろしさがより際立つように、暗い中ペンライトの青白い光で天井を照らしたり、「こっちへ来―い」という不気味な掛け声を入れたりする演出をしました。とても幻想的で、来てくださった方々に楽しんでいただけたようでした。朗読の他にも地元で人気の和菓子屋である油屋さんとコラボし、名物のみそまんにゼミで作った八雲の後ろ姿が入ったシールを貼って販売しました。私も販売を担当しましたが、有難いことにイベントが終わるころには完売しました。自分たちが考えたものが形になり、たくさんの方々に届くのを目の当たりにして嬉しく思います。私は細川ゼミに入った当初、地域活性化を目指す活動をすることになるとは思ってもみませんでした。しかし、活動を通して文学もその地域に人を呼び戻したり、自分たちが住む地域の良さを気付かせたりする力があることを知り、文学の楽しみ方の幅が広がったと感じています。

（倉田）

〔当日配布したパンフレット〕



「雪おんな」の朗読

作品に登場する「小川のお地蔵様」の前で「漂流」を朗読。
左の写真は「こっちへこーい」と亡霊たちが海の底から呼びかける場面。本堂の照明を落とし、蝋燭と青いLEDライトで演出。

会場では、油屋さんのご協力のもと、八雲シール付きの「みそまん」を販売。

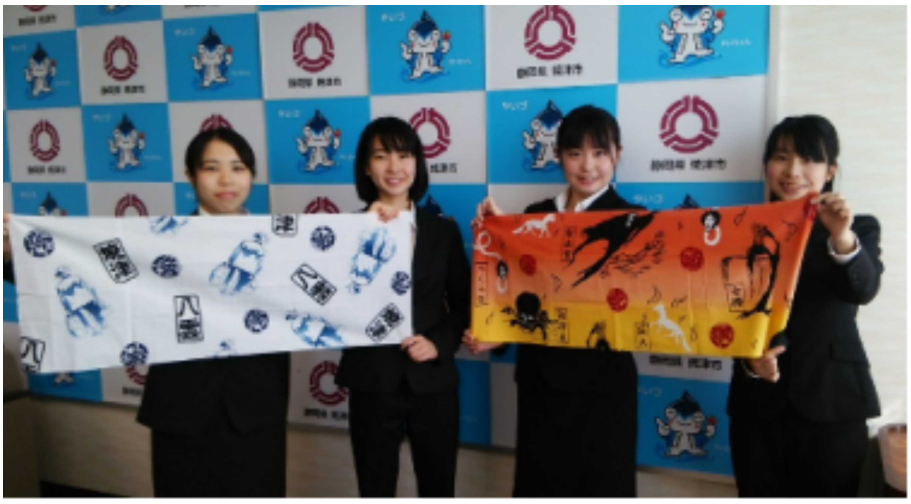
焼津市長への成果報告

～八雲手拭い・妖怪手拭いの完成披露～

日程：2017年３月29日（水）13：30

場所：焼津市役所

報告者：生熊美汐・平松里苗・澤野華世子・倉田麻有



このプロジェクトで一番印象に残っていることは、手ぬぐいづくりです。とくにゼミの皆とデザインを考えた場面が印象に残っています。ゼミの終わりにパソコンを操作する澤野を囲み、妖怪手ぬぐいの背景の色を決める作業を始めました。背景色についてはゼロからのスタートでした。妖怪のおどろおどろしい感じを出すために、黒や灰色系の暗い色を設定してみたのですが、逆に妖怪が目立たなくなってしまいました。明るい色にしてみようということで、次は黄色やピンク系にしてみました。黄色もよかったのですが、どこかチープに見えてしまう印象でした。そして、今でも話題に出る「ネオンピンク」は、今考えると迷走の果てだったように思います。一瞬、これでいいかもしれないと全員が思いかけたあのゼミ室の雰囲気は異様だったにちがいありません。私自身、今日これ以上考えてもいい案は出ないだろうと半ば諦めモードでした。しかし、締切もありその日に決めるしかない状況だったため、なかなか辛かったのを思い出します。隣の研究室の竹部先生の助言やお菓子の差し入れもあり、少しリフレッシュしたとき、ふと「夕焼け色」に決まった気がします。迷走して「ネオンピンク」にいきついたことは思い出せるのですが、決まった場面は不思議とうろ覚えです。この手ぬぐいづくりのように、ゼロから手探りで進み、なりゆきで良い結果を出すところがこの一年のＹＹプロジェクトだったように思います。一年間、楽しかったです。（平松）

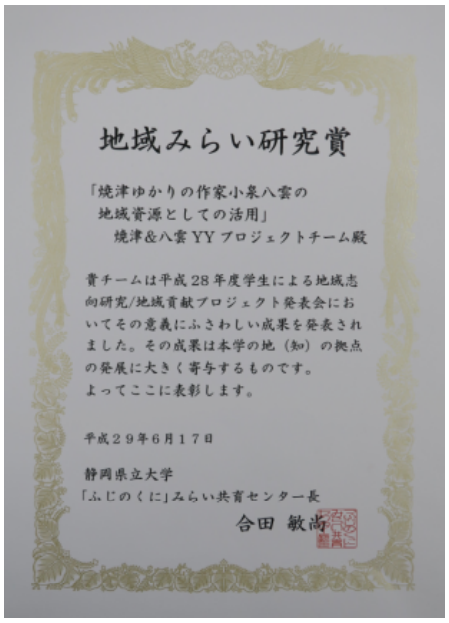
地域貢献プロジェクト成果発表会

日程：2017年６月17日（土）16：30～18：30

場所：静岡県立大学看護学部棟4F13411教室

報告者：原田幸枝・平松里苗・佐々木真子・澤野華世子

テーマ：焼津市ゆかりの作家小泉八雲の地域資源としての活用



平成28年度「地域みらい研究賞」受賞

八雲で奏でるYaidzuノスタルジー

日程：2017年６月24日（土）14：00～16：00

場所：焼津小泉八雲記念館　多目的室

【プログラム】

一、「焼津踊り」「八雲小唄」
　　唄：青野みちのさん
　　三味線：横江誠人さん

二、朗読「焼津にて」「漂流」
　　朗読：澤野華世子
　　箏曲：澤野華世子
　　小股悠真

八雲作品の朗読会と「手ぬぐい」の製作

本プロジェクトにおいて、私が一番力を入れた活動は、八雲作品の朗読会と「八雲手ぬぐい」「妖怪手ぬぐい」の製作です。

プロジェクトが始動して初めての大きな企画として、第一回目の朗読会「八雲作品の朗読と箏曲のしらべ」が焼津市海臧寺で行われたのは、昨年度の 11 月でした。私はこの朗読会において、パンフレット・チラシの製作、箏曲の演奏、そして八雲作品「漂流」の朗読という様々な面から関わることが出来ました。この朗読会をきっかけに、自分の朗読を通して、焼津市の方々をはじめとする多くの方に改めて八雲の作品を魅力を知ってもらうということの喜び、楽しさを知り、また私にとっても、焼津市の方の温かさを知るきっかけとなりました。

そして本年度、第二回目に焼津市の小泉八雲記念館で行われた朗読会「朗読・唄・三味線・箏～八雲で奏でる Yaidzu ノスタルジー～」では、前回の朗読会と同様、箏曲と「漂流」の朗読のほか、「焼津にて」の朗読も行いました。この会では 3 年生が加わったことで、前回の朗読会よりもさらに演出や内容に凝り、様々な人との交流もありました。

そして私にとって最後の朗読会となった、8 月の焼津市での「夏のあかり展」において常照寺で行われた朗読会では、箏曲伴奏と、怪談「耳なし芳一」の朗読を行いました。三回目の朗読会まで、八雲の代表作である『怪談』を朗読したことがなかったので、この時の朗読会は特に気合を入れて練習し、披露した記憶があります。

また、第一回目の朗読会を終えてから、「八雲手ぬぐい」と「妖怪手ぬぐい」の製作に本格的に乗り出しました。手ぬぐいは県の伝統工芸技術である浜松注染で仕上げるため、実際に浜松の手ぬぐい工場へ足を運び、手ぬぐいの製作過程を見学したうえで、どのようなデザインなら浜松注染の良さが引き立つ手ぬぐいになるだろうか、ということを考えながらデザインをしました。美しいグラデーションが印象的な手ぬぐいが完成したことで、ＹＹプロジェクトの活動の中で形に残るものを自分の手で作ることができたという喜びややりがいを実感したと同時に、八雲の作品や、焼津の魅力、静岡の伝統技術などを発信できるものがこうして出来たことで、これからさらなる「つながり」が出来るのではないかという期待が生まれました。

こうした朗読会への貢献や手ぬぐい製作におけるデザインなどの活動のほかに、様々な場所でＹＹプロジェクトの活動についてのプレゼンを行ったり、焼津市役所の若者倶楽部と合同で焼津市公式の LINE スタンプを製作したりなど、多くの面でプロジェクトに貢献できたと思います。

（澤野）

第十回 浜通り 夏のあかり展　朗読会

日程：2017年８月５日(土) 19：00～20：30

場所：常照寺本堂（焼津市城之腰）

主催：ＮＰＯ法人浜の会

【プログラム】

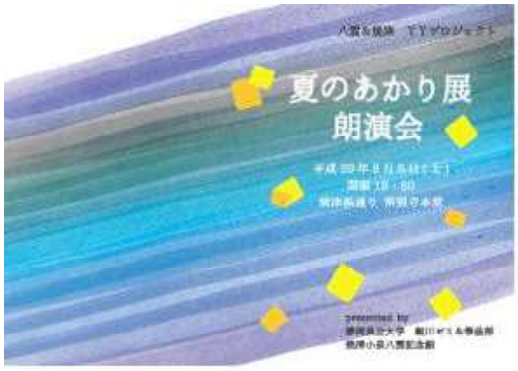
一、朗読「焼津にて抄」
　　朗読: 西田真央
　　箏: 澤野華世子

二、箏曲「みずうみの詩」
　　演奏: 一箏　生熊美汐
　　二箏　澤野華世子

三、朗読「耳なし芳一」
　　朗読: 澤野華世子
　　箏: 生熊美汐

ゼミの活動でいちばん印象に残っていることは、妖怪の行燈制作です。現在ゼミでは、わたしたちの代からはじめた焼津市の地域活性化に取り組んでいて、文学ゼミらしく、焼津市とゆかりのある「小泉八雲」を結び付けての活性化に取り組んでいます。昨夏は毎年焼津市で行われている「夏のあかり展」に参加させていただくことになり、八雲作品の怪談の朗読会も一緒に開催するということで、妖怪の行燈を制作しました。以前習字を習っていた私は、その行燈に描かれた妖怪たちの名前書きを担当させてもらいました。和紙に字を書くのは思いのほか難しかったのですが、たくさんの方々の目に入るということで納得のいくものに仕上げたいと思い一生懸命制作しました。「夏のあかり展」当日、はじめてあかりのついた状態で自分たちが制作した行燈をみたのですが、夏の夜、怪談を語るのにふさわしい雰囲気のある仕上がりになっていたので頑張ってこだわった甲斐があったと感じました。来場している方々の中に私たちが制作した行燈を写真に収めてくださっている方もいらして、とても嬉しかったです。行燈制作は朗読会とともに、大成功だったと感じました。この地域活性化というテーマはすぐに成果がでるものではないけれど、多様な才能を持っている後輩たちなので、今後も引き続き頑張ってほしいと思います。（佐々木）

〔当日配布したパンフレット〕



やいちゃん公式LINEスタンプ制作発表会

日程：2017年８月７日(月) 14：00～15：00
場所：焼津市役所会議室 101号室
出席者：澤野華世子・生熊美汐・榛葉佳奈
阿部風香・金子美生・狩野諒奈
共同制作：焼津市役所（若者倶楽部）・徳田有希

やいちゃん＆海坊主

やいちゃん＆船幽霊

やいちゃん＆狐火

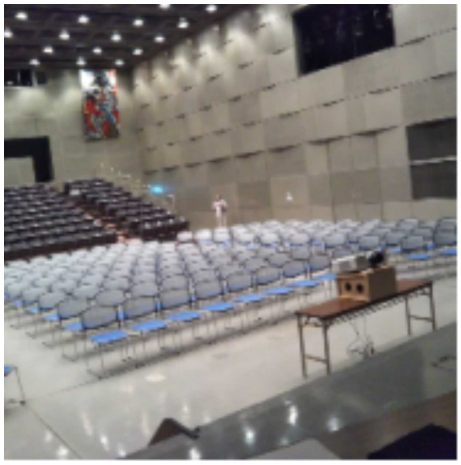
シンポジウム

「地域資源としての文学～小泉八雲による地域づくり～」

日程：2017年10月８日(日) 13：30～16：40
場所：焼津文化会館小ホール
焼津小泉八雲記念館開館10周年記念

【プログラム】
第１部　紺野美沙子公演
「トークと音楽、朗読の時間」

第２部　シンポジウム
「地域資源としての文学」
基調講演：梅本順子（日本大学教授）
パネルディスカッション
　小泉凡（名誉館長/小泉八雲曾孫）
　松永六郎（小泉八雲顕彰会会長）
　島根県立大学短期大学部
　　ゴーストみやげ研究所学生
　静岡県立大学　細川ゼミ
　原田幸枝・澤野華世子・阿部風香
　細川光洋（司会）



シンポジウムの会場で

「焼津&八雲 YY プロジェクト」の YY は「焼津(Yaidzu)と八雲(Yakumo)」の頭文字であり、「わいわい賑やか」の意味も含まれています。プロジェクトの名前に込められた思いのように、この約 1 年間の活動の中で焼津や八雲を通じて多くの人々と関わりを持つ事が出来ました。

これまで商品開発提案やイベント企画を行ってきましたが、やはり自分たちの考え・思いが形になり、多くの方々に目にしてもらえたことが大きな喜びでした。その中でも特に達成感を感じたのは今年 10 月のシンポジウムです。

今年のシンポジウムでは、私は八雲手ぬぐいや八雲シールなどのグッズ販売を担当していました。有名な女優さんの朗読目当てのお客さんが大半らしく、殆どの方は入口の販売コーナーに目も向けません。数人が視線をこちらに向けたり、商品の前に寄ってくれたくらいでした。少し残念な気持ちでいたのですが、朗読の後に八雲グッズについての PR をしたところ、休憩時間にはお客さんが殺到。まさに飛ぶように商品が売れました。「これ、どんな商品？」と説明を求めて来るお客さんに商品の完成までの由来を教えてあげると、興味をもって手に取って下さいました。中には全商品購入される方も。また「すごいね、頑張ってね」と活動を応援して下さる方もいて、嬉しくなりました。きっと朗読を聴きに来た方々の中には、焼津や八雲をあまり知らない人もいたと思います。でも少し耳を傾けてもらうだけで、こんなにも皆さんの反応が変わるとは思っていませんでした。

「言葉」は真っ直ぐに心に届きます。生の声で、自分たちの言葉で思いを伝える事の大切さをこの一年間で実感しました。受け身ではなく、積極的に。これからも八雲の、そして焼津の魅力を発信し続けて「わいわい賑やか」に焼津を盛り上げていってほしいです。

(生熊)

シンポジウム会場では、松江・焼津で学生が制作した八雲グッズを販売。大好評でした。

シンポジウム「地域資源としての文学」を終えて
―「焼津＆八雲 YY プロジェクト」と焼津の未来―

焼津小泉八雲記念館　学芸員　那須野絢子

八雲商品の開発プレゼンテーションに始まり、市内八雲ゆかりの地を会場にしたイベントの開催を経て、「八雲手拭い」「妖怪手拭い」の商品化実現に至るまで、「焼津＆八雲 YY プロジェクト」を主動し、大きな成果を残すことに成功した細川ゼミのメンバーに、まずは大きな拍手を送りたいと思います。

焼津小泉八雲記念館が開館した当初、収蔵資料の調査と整理、そして館内で開催する展示会とイベントを暗中模索で進めていた頃の私には、「文学を観光資源として位置づける」などという考えは正直全く思いも付かないものでした。しかし、記念館の博物館として機能が安定し、市民の方への普及に関しても手ごたえを感じることができ始めた頃、もっと外へ出て他組織、他施設との連携を以って新しい八雲普及をしていかなければならないのではないかと考えるようになりました。そんな時にふと記念館を訪れ、プロジェクトの提案を下さったのが細川先生でした。

様々な好機、人に恵まれ、プロジェクトは順調に進み、2017 年 10 月 8 日、その成果発表も兼ねた焼津小泉八雲記念館開館 10 周年記念シンポジウムを無事終えた時、深い感慨に浸りながら、これまでの活動を振り返り、改めてその意義の大きさに気付かされました。

シンポジウムの基調講演において梅本順子先生は、「冬のソナタ」や「君の名は」の事例を挙げ、映像化されたものも含め、文学作品はすべて地域資源と成り得ると述べておられました。このお話を伺い、YY プロジェクトが掲げた「小泉八雲を観光資源として活かす」というテーマが、新しい文学鑑賞の在り方として、すでに世間では根を下ろしているのだという思いが胸を衝き、非常にうれしい気持ちになりました。細川ゼミの皆さんが、若いアイディアを出し合って作り上げた手拭いは、実際すでに焼津を訪れた多くの観光客の方が買い求めて下さっており、このことは、八雲による焼津の町おこしの記念すべき第一歩となったといえます。

10 月 8 日の「公演とシンポジウム」（第 1 部紺野美沙子氏公演、第 2 部シンポジウム「地域資源としての文学」）が、小泉八雲を通してみた過去と未来のコントラストを上手く描き出したように、焼津における今後の小泉八雲顕彰も、その両方の側面を以って進められなければなりません。焼津小泉八雲記念館が 10 年、20 年後の未来においても八雲巡礼の松江に次ぐ拠点として存続し、焼津市が小泉八雲ゆかりの地として広く知られ、多くの八雲ファンが訪れる町であるために、幅広い世代へ向けてのアピールが必要になってくると思います。YY プロジェクトの活動は、そんな焼津における小泉八雲の未来を担っていくものとして、今後是非継続して続けていくことができればと考えます。今年卒業する 4 年生が形に残した実績と経験から、様々な意思を後輩ゼミ生が引継ぎ、新しいアイディアで一緒に焼津を盛り上げていってくれることを期待しています。

資 料 編

企画要綱・企画書

朗読用台本

1 「焼津にて」抄

2 「漂流」

成果物一覧

・「八雲シール」
・「八雲手拭い」「妖怪手拭い」
・「やいちゃんLINEスタンプ」
・「妖怪クリアファイル」

企 画 要 綱　　（2016 年 8 月 1 日現在）

■プロジェクト名　「焼津＆八雲 YY プロジェクト（Yaidzu ＆ Yakumo Project）」

■主　催　焼津小泉八雲記念館
焼津市観光協会
静岡県立大学国際関係学部 細川光洋ゼミ

■趣　旨　「地域資源としての文学」をプロジェクトテーマに、焼津市ゆかりの作家小泉八雲と地域とを結び付けて、新しい地域デザインに取り組み、焼津市の活性化を目的とする。

■概　要　焼津小泉八雲記念館、焼津市観光協会、静岡県立大学国際関係学部細川光洋ゼミの３組織が連携し、小泉八雲に因んだ商品開発に取り組む。ゼミ生が発案した菓子、食品、文房具等の八雲関連商品を、地元企業の協力の元開発し、観光客向けの焼津土産としての定着を狙う。

■成果の見込み・展望

小泉八雲は、世界レベルで名の知られる文豪であるため、焼津市を訪問する国内外からの観光客の関心をひく格好の観光資源といえる。現在八雲記念館には多くの観光客が足を運んでくださっているが、その一方で、文学館という固いイメージから、文学に関心の無い人、文学館を敷居の高い場所と捉えてしまう人からは敬遠されがちな施設と言える。そのため、文学を地域資源としてとらえ直し、観光客向けの商品を売り出すことで文化と産業、観光が結び付き、焼津市の活性化に繋がると期待できる。特に、八雲が怪談作品の中で描いた「妖怪」は、子供から大人まで多くの人の関心を得られるモチーフであるため、観光客が「欲しい！買いたい！」と思えるような商品開発も格好の材料となるのではないかと思われる。

また、年配層が記念館来館者の圧倒的多数を占める現状の中で、大学生を主体としたプロジェクトを行うことは大変有意義なことであると思われる。このプロジェクトを広く広報することで、若者層にも八雲への関心を示してもらえるのではないかと期待する。

今後のプロジェクトの流れ

・ゼミ生による民間業者への公開商品プレゼン実施（9 月 9 日）
・プレ事業として、県立大学学生による八雲朗読会の実施（11 月 27 日）
・商品開発と並行し、「八雲文学散策コース」等の企画及び作成を行う。

焼津＆八雲 Y.Y.プロジェクト

企 画 書

焼津小泉八雲記念館・焼津市観光協会
細川ゼミ（静岡県立大学）
平成 28 年 9 月 9 日

概　要

焼津市にゆかりのある世界的に有名な文学者がいる。小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）だ。彼は焼津の海や町並みをたいへん気に入り、晩年、家族とともに 6 回の夏休みを焼津で過ごした。八雲は焼津にちなむ作品――「焼津にて」「漂流」を残している。焼津には松江と同様に小泉八雲記念館もあるが、文学館は敷居が高く若者や文学に関心のない人からは敬遠されがちである。そのため、文学を観光資源とした町おこしができないかと考え、当プロジェクトを企画した。

当プロジェクトは、焼津小泉八雲記念館・焼津市観光協会・静岡県立大学国際関係学部細川光洋ゼミ（日本近代文学専攻）の三組織が連携し、学生が企画提案した小泉八雲にまつわる商品の開発やイベントなどを計画・実行し、焼津市の活性化を目指す。八雲の代表作である『怪談』には、多くの「妖怪」たちも登場する。〈八雲〉〈妖怪〉〈焼津〉の三者を結びつけることで、あらたな魅力を創出することも可能であろう。主なターゲットは観光客であるが、学生が主体になって活動することによって、若者にも関心を持ってもらうことを期待できる。

YAIDZU 八雲妖怪８紹介

ろくろ首

登場する作品:『怪談』「ろくろ首」

特徴: 元の場所から胴体を動かすと首が帰ってこられない。

〔あらすじ〕 武士から出家した僧侶が旅の途中で宿を探していると、木こりに出会う。夜、僧侶はその 5 人の首がないのを見て。ろくろ首であることに気づく。襲ってくるろくろ首たちを僧侶は倒したが、一匹が袖に噛みつき、そのまま旅を続けた。盗賊がその頭を買ったが、盗賊は怖くなりそれを供養した。

(画:小泉八雲秘稿画本『妖魔詩話』のスケッチ)

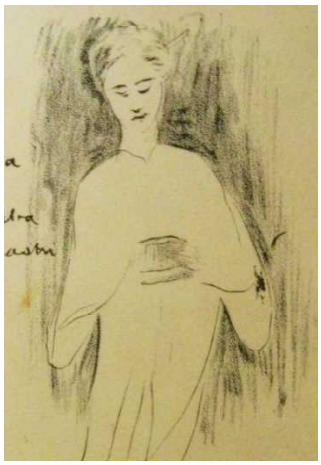
耳なし芳一

登場する作品:『怪談』「耳なし芳一」

特徴: 体にお経が書かれている(妖怪ではないが)。

〔あらすじ〕 昔、下関の阿弥陀寺に芳一という琵琶法師がおり、彼は安徳天皇の墓の前で壇ノ浦の合戦を演奏していた。芳一が平家の悪霊に取りつかれていると知った和尚は芳一の体に経文を書いた。しかし、芳一の耳にだけ書き忘れてしまったため亡霊には両耳だけが見えており、迎えに来た証拠に亡霊は芳一の両耳をもぎとって帰っていった。

雪女



登場する作品:『怪談』「雪女」

特徴: 若く綺麗な青年には優しい。雪のような白い肌。

〔あらすじ〕 ある冬の日、吹雪で下山できなくなった木こりがいた、彼は雪女に殺されそうになるが、若くきれいな顔立ちをしていたためこの夜のことを秘密にするという約束をし、命を助けられる。数年後、若者は雪のように白い美女と結婚し家庭もでき、うっかり妻に秘密を話してしまう。するとたちまち女は白い霧となり消えていってしまう。

(画:小泉八雲秘稿画本『妖魔詩話』のスケッチ)

海坊主

登場する作品:『妖魔詩話』
特徴: 大きなつるつる頭にぎょろつかせた目、触手をくねくねさせている。
〔八雲による解説〕海坊主は時化の日などに海底から獲物を狙って出現する。目をぎょろつかせた大きなつるつる頭はどこか僧侶に似ていて、くねくねした触手は僧侶の法衣がきらめく様のようだ。
(画:小泉八雲秘稿画本『妖魔詩話』のスケッチ)

狐火

登場する作品:『知られざる日本の面影』
特徴: 好んでさみしい場所に出現する。悪事を働くだけでなく人間に恩返しをすることもある。
〔八雲による解説〕狐は昼夜問わず災害が起きたと思わせるなど、人間に対して悪戯をする。ある農夫が噴火の時に怖がらなかったのは、それを狐の仕業と信じていたからだった。
(画:小泉八雲秘稿画本『妖魔詩話』のスケッチ)

古椿

登場する作品:『妖魔詩話』
特徴: 古い椿の妖怪となったもの。血の雨を降らす。
〔八雲による解説〕古椿即「化け椿」。血潮に似た赤い椿は生首のように散る。

夜嵐に血しほいただくふる椿
ほたほた落ちる花の生首

(画:小泉八雲秘稿画本『妖魔詩話』のスケッチ)

船幽霊

（画：小泉八雲秘稿画本『妖魔詩話』のスケッチ）

登場する作品：『妖魔詩話』
特徴：船に水を掛け沈めようとする。
〔八雲による解説〕船幽霊は海に出没し、船を追いかける溺死者の幽霊である。船員に手桶や柄杓を貸せと言い、そのまま貸すとたちまち船に水をかけて沈めてしまう。桶や柄杓の底を抜いてから渡すと助かることができる。

のっぺらぼう

登場する作品：『怪談』「むじな」
特徴：顔のパーツがない。
〔あらすじ〕ある夜、一人の商人が紀伊国坂を通りかかると、女がしゃがみこんで泣いていた。商人が声をかけると、女がのっぺらぼうなことに気づいた。驚いた商人が蕎麦屋の屋台に駆け込み、店主に今見た化け物のことを話そうとすると、店主は「その化け物はこんな顔でしたか」と振り返る。彼もその顔ものっぺらぼうであった。全ては貉が変身した姿なのであった。

商品企画案

＊「八雲妖怪８」をもとにデザインを作成する。

【文具】
・クリアファイル
・ブックカヴァー
・栞
・ノート／手帳
・絵はがき
・付箋（ゆるいコメント付き）

【雑貨】
・トートバッグ
・パスケース
・キーホルダー
・サーモマグ（妖怪おでましマグ）

【食品】
・はんぺん
・八雲ナルト
・乙吉ダルマモナカスープ
・生卵風スイーツ
・妖怪サブレ

【魚河岸デザイン】
・妖怪魚河岸シャツ
・妖怪手ぬぐい
・八雲ハンカチ

【イベント・その他】
・焼津ゴーストツアー
・八雲作品朗読会
・「夏のあかり展」への参加
・妖怪 LINE スタンプ

【朗読用台本１】（村松眞一訳／脚色改訂：細川）

焼津にて 抄　　小泉八雲

▼箏曲１　（20秒くらい序奏として）
▽波音１　（会場の両脇で）

日がカンカン照ると、焼津というこの古い漁師町は、中間色の、なんともいえない魅力的な色に染まる。まるでトカゲの背のように、町はくすんだ色合いを帯びて、小さな入り江に沿って湾曲する、あの灰色の海岸と同じ色になる。町は、大きな丸石を積み上げた風変わりな堤防で、荒海から守られている。この防壁は、波打ち際では、階段のような形にできている。組み合わされた丸石は、地中深く打ち込んだ杭の列の間に、竹籠のようなもので編みこまれ、固定されている。杭の一つ一つの列が、それぞれの段をしっかりと支えているのである。

防壁の上から陸の方を眺めると、町全体が一望できる。灰色の瓦屋根、風雨にさらされた灰色の家並み、そのあちこちに、寺のありかを示す松の木立ちが見える。海の方は、何マイルも遙か向こうに、のこぎりの歯のような青い山並みが紫水晶のようにくっきりと浮かびあがり、そして、その彼方、左手には、神々しい富士の姿が、ひときわ高く聳え立っている。岸壁と海の間に砂はなく、ただ石、丸石の、灰色の斜面があるばかり。打ち寄せる波とともに石が転がるので、荒れた日に波打ち際を通るのは、本当にいやなものである。一度、打ち寄せる石に打たれると、その経験はなかなか忘れられたものではない。――私はもう、何度か打たれてしまった。

▽波音２　（会場の両脇で。たっぷりと）

たまたま私は、盆の、つまり死者の祭りの三日の間、焼津にいた。それで三日目の晩の、最後の儀式――美しい送り火を見たいと思った。日本の多くの地方で、海を渡っていく死者の霊には、ごく小さな船が用意される。それは「精霊船（しょうりょうぶね）」とよばれ、食物と水と、火をともした香のお供えを入れ、夜送り出されるときは、小さな灯籠を乗せる。聞くところでは、灯籠は暗くなってから送り出されるということであった。ほかの土地では、真夜中がふつうその時刻であったから、焼津でも、それがお別れの時刻だとばかり思っていた。それで、その見物に間に合うように起きるつもりで、うかつにも夕食後ひと眠りしてしまった。ところが十時になって、浜へ出てみると、すべてが終わって、みんな家に帰ったあとであった。海上には、蛍火の細長い群れのようなものが見える。灯籠が列をなして沖へ流れ出ているのであった。けれどそれはずいぶん遠く、色とりどりの光の点にしか見えなかった。私はひどくがっかりした。二度とはない好機を、むざむざ取り逃してしまったと思った。というのは、こういった

古いお盆の習慣は、急速に滅びつつあるからである。しかし次の瞬間、その灯のところへ、思いきって泳いで行ってみればよいと思いついた。灯はゆっくりと動いていた。私は着物を浜辺に脱ぎ、海に飛びこんだ。海は穏やかで、美しい燐光を放っている。一掻きするごとに、黄色い火の流れがきらめいた。急ぎ泳いでゆくと、思ったよりずっと早く、一番後ろの灯籠に追いついた。このささやかな船出を邪魔したり、静かに流れるその進路を変えたりするのは、心無いことだと思われた。そこで、その灯籠の一つに近づき、それをくわしく調べてみることで満足することにした。――紙枠の一面は赤、一面は青、一面は黄、そして四番目の右半分は黒、左半分は無色のままで白。透かし紙のどれにも戒名は書かれていない。灯籠の内側には、ただチラチラ、チラチラと蠟燭の火がゆらめくばかりだった。

▽波音３　（会場の両脇で）
▼箏曲２　（20 秒くらい）

私は、じっと目をこらして、あの危うく光り漂うものが、闇の中をぷかり、ぷかり、流れてゆくのを見守っていた。風や波にあおられて、灯籠は次第に散り散りになってゆく。その一つ一つが、透かしの色をふるわせて、闇におびえる一つの命のように思われた。それは、この世の果てへと運んでゆく盲目の潮の流れに、かすかに、かすかに身震いしているのだと……。思えば私たち人間自身、この灯籠のように、いや、もっと深い、もっとおぼろげな人生の海へと送り出され、漂い流れ、否応なしに、散り散りに分かれ消えていく身の上なのかも知れない。やがて、思いの灯もつきる。すると、私を支えるはかない骨組みも、かつては美しい色をしていたそのすべてが、残骸となって、永遠に色彩のない虚空（こくう）へと溶けてゆかねばならない……。

こんなことを考えている間にも、私は自分が本当にひとりきりでいるのかどうか、怪しくなってきた。私のそばで揺れるものの中に、単なる光のゆらめき以上の何かが潜んでいるのではないか。消え入りそうな炎につきまとい、それを見つめている自分を、さらに遠くからそっと見ているものがあるのではないか。かすかな寒けが私の身の上をよぎる。おおかた海の底からのぼってくる冷気か、あるいは、霊的な空想がひそかに忍び寄ってきたからだろう。

ふと、この海辺のある言い伝えが思い出された。「精霊が通る時は危険だ」という古い戒めである。盆の夜、こうして海に出て、死者たちの送り火に手を出したり、あるいは手を出しているように見える自分に、もし何か禍いがふりかかりでもすれば、やがて私も、気味の悪い伝説の中の一人にされてしまうだろう。「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」――私は灯籠に向かってお別れの念仏を唱え、岸へと急いだ。

▽波音４　（会場の両脇で）

ふたたび、浜辺の石に足がふれたとき、目の前に急に白い影が二つ見えたのでびっくりした。けれど、「水は冷たかったですか」と訊ねるやさしい声に、ほっとした。それは宿の主人、魚屋の乙吉（おときち）の声で、おかみさんと一緒に、私を探しに来ていたのだった。

「水が冷たくて気持ちよかったので」と、着物をひっかけながら私は答えた。

「まあ」と、おかみさんが言った。「盆の晩に、海へ出るのはよくないことですよ。」

「そんなに遠くへは行かなかったけれど……」、私は答えた。「ただ、あの美しい灯籠を近くで見たいと思っただけです。」

「河童も溺れ死ぬ、と言います」と乙吉は強くいった。「この村の男で、しけの晩に舟がこわれて七里も泳いで帰った者がいました。ですが、後に溺れて死んだです。」

七里というのは、十八マイル弱にあたる。いまこの部落にそれだけ泳げる若者がいるのか、と私は尋ねた。

「たぶん、おります」と、乙吉は答えた。「泳ぎの達者なものは大勢おります。この土地のものはみんな泳ぎます、小さい子供でさえ。ですが、漁師がそんなに泳ぐときは、自分の命を助けるときだけです。」

「それとも、恋人があるときとか」とおかみさんがつけ足した。「端島（はしま）の娘のようにね。」

「端島の娘……それは誰です？」と私は尋ねた。

「漁師の娘でした」乙吉が言った。「その娘には、七里離れた網代（あじろ）に好きなひとがおりました。それで、夜、そのひとのところへ泳いでいっては、朝、泳いで帰ったものでした。男はその道しるべにいつも明かりをともしておきました。ところがある暗い晩、明かりを忘れたか、風で消えたかして、それで娘は波にのまれ、溺れて死んだです……伊豆のあたりでは、とても有名な話です。」

▽波音５　（会場の両脇で）

▼箏曲３　（20 秒くらい。幻想的に余韻を残して）

盆のころは、きまって海が荒れる。だから翌朝、波が高くなってきても、私は特に気には留めなかった。けれど、一日中、波は高くなるばかり。午（ひる）を過ぎるころには、驚くほどまでになった。私は、防波堤の上に座り、日が暮れるまで、海を眺めていた。

おそらく、海のうねりを眺め、その轟きを耳にして、厳粛な思いに打たれなかった者など、これまでいないであろう。牛や馬のような獣でさえ、海の前では、瞑想的になるのを私は知っている。その広漠たる光景と無限の響きが、この世の、一切のものを忘れさせてしまうかのように、彼らはじっと立ったまま、目を開き、耳を澄ますのである。

この原始的な想像は、日中よりも夜のほうが、一層強く掻き立てられる。燐光で青く輝く晩、潮の流れがほのかに匂い、水面（みなも）がかすかに明滅するさまは、いかにも命あるもののようだ。その冷たい焔の色合いが微妙に変わるのは、まるでトカゲの背のよ

うなのだ！

　そんな夜、海にもぐってごらん。青い闇のなかでそっと目を開き、体の動きにつれて、光の粒があやしく沸き立つさまを、じっと見てごらん。水の中で見る光の粒は、まるでその一つ一つが目を開けたり閉じたりしているよう。そんな時、私は何か意志をもった大きなものにすっぽりと包まれているような気がする。目があり、感覚があり、意志がある、何か生命に満ちたものの中に、その冷たい無限の「霊」のうちに、身も心もやさしく包まれて、ぼんやりと浮かんでいるような気持ちになる。
　――いつまでも、いつまでも。……そう、いつまでも、いつまでも。

（「焼津にて」抄、おわり）

▽波音６　（会場の両脇で）

▼箏曲４　（20 秒くらい。幻想的に余韻を残して）

【朗読用台本２】（村松眞一訳／脚色改訂：細川）

漂 流　　小泉八雲

▽波の音１　（会場の両脇で）

嵐が近づいていました。私は強風に吹かれながら、防波堤に腰を下ろして、荒波の砕けるのを眺めていました。私の隣には、天野甚助という老人が座っていました。東南の空は、一面、墨を流したように暗く、ただ海だけが、奇妙な明るさをたたえていました。時おり山のような大波が、押し寄せては砕けています。

大波は、一キロほど先でドドッ、ドドッと地響きを立てては崩れ、その波の飛沫（しぶき）が、波打ち際一面を被いながら、私たちの顔近くまではねかかって来ます。大波が砕け散るたび、砂利をさらってゆく波音は、まるで全力で疾走する列車の轟音のようでした。

私は天野甚助に、「見ていると、何だか恐くなるね」と話しかけると、彼は少しにやりとしました。

「わっしはこれよりもっと、もっと荒れる海で、二日二晩泳ぎました――」

「あの時、わっしは十九歳。八人乗り込んだなかで、助かったのは、わっしただ一人だけでした」

――甚助老人は語りはじめました。

▼箏曲１　（ゆっくりと）

「わっしどもの船は福寿丸といって、船主はこの町の前田甚吾郎でした。乗り組んだ者は、一人をのけると、みな焼津の者ばかり。船長は斎藤吉右衛門といって――六十過ぎの人、城之腰（じょうのこし）に住んでいて、ちょうどすぐ後ろの通りのところです。もう一人、仁藤正七という爺さんが乗っていて、新屋（あらや）に住んでいました。

それから四十二歳の寺尾勘吉、その弟で巳之助という十六になる若者も一緒でした。寺尾の衆も新屋に住んでいました。それから三十になる斎藤平吉。それに松四郎。鷲野乙吉というのがもう一人、城之腰に住んでいて、まだ二十一。――寺尾巳之助を除けば、わっしが船で一番下でした」

「わっしどもは、申年の万延元年、七月十日の朝、焼津から讃岐へ向けて船を出しました。十一日の夜、紀州沖で東南から吹き付ける暴風に見舞われたのです。夜中少し前に船が転覆、ひっくり返るなと思ったとき、わっしは板子（いたご）を一枚つかみ、海へ放り出して、すぐに飛び込みました。

その時は恐ろしく吹き荒れていました。夜は真っ暗で、一メートル先も見えません。しかし、運よくあの板子を見つけ、それを抱えこむようにしました。と、次の瞬間、

もう船は消えていました。わっしの近く、海の中にいたのは、鷲野乙吉と寺尾の兄弟と松四郎という男で、みんな泳いでいました。他の者は、影も形も見えません。たぶん船と一緒に沈んでしまったのでしょう。わっしら五人は、大波にもまれて漂う間、互いに声をかけ合っていました。それから気がつくと、寺尾勘吉だけ、他のみんなのように、板子のような木ぎれをもっていません。わっしは勘吉に向かって怒鳴りました。『兄貴ぃ、お前ぃさんには子供がある。おぃらはまだ若い―どうか、この板子を受け取ってくれ。』すると、勘吉がどなり返しました。『こんな海じゃ、板子はかえって危ねえ―甚よ、その板から手を離せ―怪我するぞ！』

わっしがそれに答えもしないうちに、黒い山のような大波が、ドッとかぶさってきました。わっしは長いこと波の下にいました。それでまた浮き上がってきたときには、勘吉の姿は、もうどこにも見えませんでした。

若い連中は、まだ泳いでいました。が、どんどん左手へ押し流されていました。お互いに大声で呼び合いました。わっしは波についていくようにしました。他の者たちはわっしに呼びかけます、「甚よう！ 甚よう！―こっちへこぉい―こっちへこぉい！」でもみんなのいう方へ行ったら、危ないことがわかっていました。と申しますのは、波が横からぶつかるたびに、わっしはその下に引きこまれたからです。そこでわっしは呼び返してやりました。『潮について行け！ 流れに乗って行け！』 けれど、連中にはわからなかったようです。それで、なおも呼んでいました。『こっちへこぉい！―こっちへこぉい！』―やがて、呼び声はだんだん遠ざかって行きました。わっしは怖くて、怖くて、返事ができなくなりました……溺れた者は、道連れが欲しくなると、『こっちへこぉい！―こっちへこぉい！』そんな風に呼びかけるものなのです、『こっちへこぉい！―こっちへこぉい！』と。」

▼箏曲２ （少し早めに、荒波のように）

「しばらくして、その呼び声は止みました。聞こえるのは、ただ波と風と雨の音ばかりです。あたりは真っ暗で、波は去っていくその時だけ見え、それが高い黒い影となって、恐ろしい力で引っぱります。その引っぱり方で、どっちへ向かえばよいか見当をつけました。雨が、砕ける波を押さえてくれました。雨が降っていなかったら、そんな荒海に、誰だって長くは生きていられなかったでしょう。

風は刻々とひどくなり、波のうねりも高くなる一方です。――わっしは**小川（こがわ）のお地蔵さま**に、一晩中、一心に祈りました。……明りですかい？ ―ええ、ええ、まったく不思議なこともあるものです。水の中に何かが光っているように見えました。ぼんやりと、ちょうどお地蔵さまの、あの蠟燭の灯りのようなものが、一晩中灯っていました……」

「明け方、海は濁った色をしていました。波は相変わらず小山のようで、風もたいへん強かった。雨としぶきが霧となってけぶり、空との境目も見えません。けれど、もし陸地が見えたとしても、そうして漂っているようにするしか、できなかったでしょ

う。わっしは腹が空いて、腹が空いて、仕方がありませんでした。やがてその苦しさは、どうにも我慢できなくなりました。一日中わっしは大波にもまれ、風と雨にうたれて漂っていました。陸地は影すら見えません。わっしはどちらへ流されているのかも分かりませんでした。あんな空模様では、西も東も分かったもんではありません。」「暗くなると、風は止みました。それでも雨はまだひどい降りで、あたりは真っ暗です。空きっ腹の苦しみはなくなりました。けれど、体が弱って―すっかり弱りきって、わっしはそのうち沈んでしまうに違いないと思いました。

そのときです。誰かがわっしを呼んでいるのが聞こえました―前夜わっしを呼んでいた「あの声」です―**（照明消灯）**

▶『こっちへこーい！―こっちへこーい！』
『こっちへこーい！―こっちへこーい！』
※会場後方で青いセロファンをはった電灯を揺らしながら輪唱×２

すると不意に、福寿丸の四人の仲間の姿が見えました―泳いでいるのではなく、わっしのそばにすぅっと立っているのです―寺尾勘吉と寺尾巳之助と鷲野乙吉と松四郎でした。みんな青白い、怒った顔をしています。

一番若い巳之助が叱るように叫びました。『ここでおれは舵を決めにゃならん。だのに、甚助、お前は寝てばっかりいて！』それから寺尾勘吉が――それは、わっしが板子を渡そうとした男ですが―両手で掛け軸を持ってわっしの上にかがみこみ、それを半分広げて申しました。『甚よう、これが阿弥陀さまの絵だ―見ろ、いまこそ念仏を唱えにゃいかん！』勘吉の言い方は何とも気味が悪く、何だか怖くなりました。わっしは阿弥陀さまのお姿を見ました。そして、すっかり恐ろしくなって念仏をくりかえしました―『南無阿弥陀仏―南無阿弥陀仏！、南無阿弥陀仏―南無阿弥陀仏！』

そのときでした。**（照明点灯）**

焼けるような激しい痛みが、太腿（ふともも）と尻を鋭く刺しました。それでわっしは、思わず板子を放し、海へころがりこんでいました。その痛みは、大きな「カツオノエボシ」のせいでした。―旦那は、カツオノエボシをごらんになったことはないでしょうね。エボシ、つまり神主がかぶる帽子のような形をしたクラゲのことです。鰹がそれを餌にするので、わっしどもはカツオノエボシと呼んでいます。どこにでも、そいつが現れると、漁師は大漁を当てにします。体はガラスのようにすき通っていて、その下に長い紫色の紐があります。その紐が触れると、痛みといったら、それはそれは大変なもので、長いこと取れません……その激痛のお陰で、わっしはようやく正気に返りました。もし、あのときクラゲに刺されていなかったら、わっしはそのまま目が覚めなかったかも知れません。わっしはまた板子に乗って、**小川のお地蔵さま**と金比羅さまにお祈りしました。それで、朝まで目を覚ましていることができたのです。」

▼箏曲３　（ゆったりと、夜明けの気分で）

「夜明け前に雨は止み、空は晴れてきました。星が見えました。明け方に、またも、うとうととしていると、不意に頭をぶたれてわっしは目が覚めました。大きな海鳥がぶつかったのでした。日が雲の向こうに昇りはじめ、波は穏やかになっていきます。やがて小さい茶色の鳥が顔をかすめました……名は知りませんが、浜でよく見かける鳥です。

陸地が見えるに違いないと思いました。後ろをふり返ると山が見えました。その形に見覚えはありませんでした。青く霞んで、十里は離れていたでしょうか。わっしはともかく、その山の方へ泳いで行こうと決めました。たどり着く望みはほとんどありませんでしたけれど……。わっしは、またもや腹が減ってきました。もう腹が減って、腹が減って、たまりませんでした」

「わっしは、何時間もその山の方に向かって水を掻き続けました。もう一度うとうとっとしました。そうしたら、もう一度海鳥がごつんとぶつかりました。一日中、水を掻きどおしでした。夕方近くになって、山の様子から、陸(おか)の方へ近づいているのが分かりました。でも、そこまで着くには、二日はかかるだろうと思いました。

ほとんど望みを失いかけた、その時、ふと一隻の船―大きな帆船を見つけました。船はわっしの方へ向かってきます。でも、もっと早く泳がないと、その船はずっと向こうを通り過ぎてしまうことがわかりました。これを逃したら、助かる見込みは、もうないかも知れない。―わっしは板子を捨て、一生懸命泳ぎました。船のすぐ見えるところまでたどりつきますと、わっしは大声で叫びました。けれど、甲板には誰も見えず、何の応答もありません。あっという間に、船は通り過ぎてしまいました。

日は沈みかけています。ああ、もうだめだ、と思いました。すると突然、甲板に一人の男が出てきて、わっしに向かって叫びました―『泳ぐんじゃねえぞ、体を疲れさすな―待っていろ、今、舟を下ろしてやるからな。』

それと同時に船の帆が下ろされました。わっしはうれしくてたまらず、もうどこからか元気が沸いてきて、ぐんぐん泳いでいきました。それから船は小舟を下ろしました。小舟が近づいて来ると、男が声をかけました―『誰か他にいるか―何かなくしたものはないか？』わっしは答えました―『板子、一枚だけ……』そのとたん、わっしは、すっかり力が抜けてしまいました。小舟にいる人たちが、わっしを引っぱり上げてくれました。でも、口もきけず、体も動けず、目の前が真っ暗になりました。」

「しばらくして、またも、「あの声」が聞こえました。福寿丸に乗り組んだ人たちの声です。―『甚よう！甚よう！』それで、わっしはぞっとしました。すると、誰かがわっしを揺さぶって申します。『おい！ おい！ 夢でも見ているのか！』

▼箏曲４　(印象的に)

気がつくと、わっしは船のなかで、カンテラの下に横になっていました。あたりはもうすっかり、夜になっていました。そばには、見知らぬ老人が、一杯のごはんを手

に持って、座っておりました。『一口食べてみるか』と、爺さんはたいそう優しく言いました。わっしは起き上がろうと思ったのですが、できません。すると爺さんは、茶碗から食べさせてくれました。茶碗が空になると、わっしは『もう一杯ほしい』と言いました。けれど、爺さんは答えました―『今はいかん、まず眠ることだ。』爺さんが、誰かに向って言っているのが聞こえました―『わしが言うまで、もう何もやったらいかん。たくさん食わせたら、死んでしまうからな。』わっしはまた眠りました。そして、その夜、さらに二度、やわらかく炊いたお粥を、小さい茶椀に一杯ずつもらいました。」

「朝になると、だいぶ気分がよくなりました。ごはんを持ってきてくれた爺さんが、わっしにいろいろ尋ねました。船が嵐で沈んだことや、わっしが長い間海を漂流していたことを聞くと、爺さんはたいそう気の毒がりました。爺さんが言うには、わっしは二日二晩でなんと、二十五里も漂流していたそうです。

『お前さんの板子を探して、拾い上げておいたぞ。たぶんお前さんは、戻ったらそいつを金比羅さんにでも奉納するだろうと思ってな』―爺さんはそう申しました。わっしは丁重にお礼を述べました。けれど、爺さんに答えました。――その板子は、**小川のお地蔵さま**に奉納するつもりです、と。わっしがたった一人、心細い嵐の海で、「助けて下さい、助けて下さい」と一心にお祈りしたのは、**ふるさとの、焼津の、小川のお地蔵さま**でしたから。」

▼箏曲５　（余韻を持たせて）

「わっしが焼津に帰ったのは、福寿丸が沈んだときから、およそ一か月たってからでした。福寿丸が沈んだという確かな知らせは、そのころ焼津には届いていませんでしたが、船の用具などが、いくつか打ち上げられておりました。それに暴風が突然やってきて、ひどく大荒れの海でしたから、福寿丸はきっと沈んで、わっしどもはみな溺れ死(じ)んだものだと信じられておりました。……他の者たちの消息はまったくつかめませんでした。船は夜、焼津の港に着きました。わっしはその晩、知り合いの家に泊まり、翌朝、わっしの両親と兄弟に無事を知らせてやりました。……わっしの話はこれで終わりです」

▽波の音２　（会場の両脇で）

「毎年一度、わっしは讃岐の金比羅さまへお参りに行きます。難破して命を助かった者は、みんなそうしてあそこへお礼参りに行くのです。そしてもちろん、**小川のお地蔵さま**に、わっしはたびたびお参りをします。

旦那、明日いっしょにお出でくだされば、旦那にもお目にかけましょう。わっしといっしょに嵐の海を漂流した、あの、一枚の板子を」

（「漂流」おわり）

▼箏曲結び（余韻を持たせて）

焼津＆八雲YYプロジェクト
成果物一覧

①八雲シール

ハーンの来日の際同行した画家、C.D.Weldon の描く後ろ姿をもとにデザイン。背景の青は焼津のシティーカラーを使用。

②八雲手拭い

八雲手拭いの帯封

C.D.Weldon の「八雲の後ろ姿」図と焼津の「魚がし」マークを浜松注染で染めたもの。

③妖怪手拭い

妖怪手拭いの帯封

八雲の『妖魔詩話』から「海坊主」「船幽霊」「古椿」「ろくろ首」「狐火」のスケッチを選び、焼津の「魚がし」マークを浜松注染で染めたもの。背景は夕焼けのぼかし染め。

④やいちゃんLINEスタンプ

焼津市役所との共同制作。焼津のマスコットキャラクター「やいちゃん」をもとに、焼津の特産品や八雲の妖怪とコラボ（40ヶのうち10ヶをデザイン）。

⑤妖怪クリアファイル

「妖怪手拭い」で作成した図案をもとにA4クリアファイルを作成。

後 記

冊子の作成にあたり、活動記録や準備資料などを見ながら、「小泉八雲」という一人の作家から、たくさんのアイディアや人とのつながりが生み出されているということに改めて気づきました。これは、一人で本を読んでいたのでは絶対にわからない文学の魅力であると思います。これからも4年生の皆さんが築いてこられた焼津の方々とのつながりを大切にしながら、新たな活動をしていきたいです。4 年生の皆さんの益々のご活躍とこの冊子がプロジェクトの新しい展開の始まりとなることを願って、結びの言葉とします。

編集委員　守屋佳奈

４年（１期生）　◎原田幸枝、青島沙紀、生熊美汐、倉田麻有、
佐々木真子、澤野華世子、鈴木麻友子、平松里苗

３年（２期生）　○阿部風香、伊澤芳美、魚取あすか、奥野華純、金子美生
狩野諒奈、小林美紅、榛葉佳奈、守屋佳奈

焼津＆八雲YYプロジェクト　活動報告 2016-2017

2018年2月17日発行
編集　守屋佳奈　狩野諒奈
発行　静岡県立大学国際関係学部　細川光洋研究室
〒422－8526　静岡県静岡市駿河区谷田52－1
TEL/FAX　054-264-5342

印刷　池田屋印刷株式会社